

第2回講演会・質疑応答

長江：質問が出ないので、座長から野村さんに

絶望的な気持ちでこられた中で、どういうことがきっかけになって、社会に貢献していこうとか、気持ちを変えていくことができたのか？きっかけになったところがあればお話し願えますでしょうか？

野村：仏教の寺に入ったのは、劣等感の裏返しでした。みんなから褒められて、自分が認められて、自分は素晴らしい宗教家だって思われたかったんですね。今思うと、そういう心境です。

自分の劣等感を治すために、心理教育を受けたりしましたが、やっぱりダメでした。ある時、キリスト教の方たちの集まりに6年ぐらい通いました。そこで、私のことをとっっても認めてくださった方たちがいたんですね。「野村さんの考え方は素晴らしいよ。精神性がすごくいいね」とほめてもらえて、「聖書の講義もやってくれないか」って言われて。それはとても自信になりました。受け入れてもらって、認めてもらって、自分の存在っていうものの根本が、そこですごく自信が持てました。認めてくださる仲間がいてくれたっていうことですね。

長江：ありがとうございました。

では、土田さんに質問をさせていただこうかと思えます。野村さんのお話にもありましたけど、保護者、要するに家族の責任とかケアが任せっ切りになっている状況ですが、活動していく中で具体的にもう少し改善できないかと思っているところがあれば、紹介していただけますか？

土田：野村さんのお話の中でも出てきましたが、多くの対象者の方から“孤独”とか“孤立”という言葉が聞かれました。そういうところを何とかしていきたいと思っています。今日のような講演会で知ってもらって、ひと声かけてもらおうとかもそうですし、そういう風になる背景には、精神障害についての理解というか、偏見があるのかなと思いますので、子どもの頃からもう少し精神疾患というか、そういうところにも興味を持ってもらえるような取り組みができれば…と考えています。

長江：ありがとうございました。いかがでしょうか？

〇〇：PSWをしているものです。患者さんを支えるご家族の方が、どういう気持ちで障害に関わっているのかを知ることで気持ちに添えたサポートができればと思って、参加させていただきました。どういう病院であれば、ご家族の方たちが足を運びやすいかというのがあれば、教えていただきたいです。

野村：いろいろとありますけど、先生に相談しやすい病院です。いろんな質問とか疑問に先生が答えていただきたい。薬についても疑問に思ったら、それについて説明をして欲しい。それから、セカンドオピニオン。他の先生にも相談したい時に、大らかな気持ちで、「いいですよ」って言ってもらいたい。あと緊急に状態が悪くなった時には、何とかその病院で受けてもらいたい。相談に丁寧に載っていただければ、ありがたい病院だと思います。

長江：緊急時の対応っていうのはかなり、いろんなところから出てくる意見でしょうか？

野村：家族には、3つの大きな苦労があるんです。1つは親なき後。親がいなくなったら誰が面倒みるんだって。それから救急医療。症状が少し悪くなった時に、相談できて、緊急に、まあ最悪の場合、往診していただいたりすると、とても助かるんですけど、それが制度的にないので、苦労してます。

長江：家族会というのは基本的に親の立場で発展していますが、今日のテーマのように、子どもさんの立場での支援は、今のところはないというところで、中学生とか高校生になっても、孤独感で大変だったというお話だったと思いますが、その辺りで具体的にあれば。

野村：全くない状態ですよ。で、兄弟姉妹の会はありますが、兄弟姉妹もだいたい20歳を超えて参加する。子どもの立場で、20歳未満だと行くところはないですよ。家族会に行っても居場所がないですもんね。小さい方たちは、いったいどうやって存在してるんでしょう。お子さんたちの姿が見えないですね。学校の先生たちは、多分、気づいていると思うのですが。でも、先生としては、方法がない。家庭訪問しても親は会わないし…。だから、学校の先生も困ってるんじゃないですかね。先生は心配はしていたけれど、どうしようもなかった。だから結局、子どもはどこにもすがれないですよ。この状況が、今はどうなんでしょう。

長江：ありがとうございます。質問、いかがでしょうか？

△△：児童相談センターの者です。児童虐待の仕事をしておりますが、児童虐待の通告の3割ぐらいは、親御さんが精神疾患で子育てができない方です。地域に、そういう支援があれば、通告に至らなくてもすむのにと 생각합니다。精神疾患の方の背後にいる子どもたちが忘れられているのが、すごくつらいです。是非ともこういう活動を展開していただけたらと思います。

長江：ありがとうございました。他にいかがでしょうか？

□□：最近、身近でも、うつとか多くなってきています。様子をみていると、環境もあると思いますが、互いに影響し合っているようにも思える。お姉さん、妹さんが、自殺未遂をされたというお話がありましたが、野村さん自身はそういった思いはなかったんでしょうか？

野村：自転車、買ってくれないんだったらもう死んでしまうとひがんで、泣いてたこともありますが、本気で死んでしまいたいと思ったことはないです。多分父親が、身近な存在でいてくれたからだと思います。父親の存在をある程度尊敬していたので、お父さんがいれば大丈夫というのがあったんだと思います。妹や姉は、父とはそんなに仲がよくなかった。それに、母があんな風だったので、僕とは違った状況だったんじゃないかと思います。

友だちがいてくれたことと、その親が、私をとってもかわいがってくれた。そういう家が2-3軒ありました。そういう地域の友だちの家族に多少、支えられたのもあったかもしれない。また、学校の先生たちが、気にかけてくれているというのもあったのかもしれない。

長江：ありがとうございました。もうお一人ぐらい、お聞きしてと思うんですけど。

■■：知り合いで、離婚経験があつて子ども3人と暮らしている方がいます。地域の保健師さんが子どもへの影響を心配して、子どもと母親を引き離して子どもを施設に入れ、母親に入院治療をという提案をしています。親も子どももそれを望んでいない状態ですが、本人同士が一緒にいることを望んでいる中で、別れさせて良いものなのでしょうか？

野村：子どもの立場から感じた通りに申しあげると、できるだけ一緒に居たいです。できれば、病的な状態に家族全体、家庭全体が陥らないように、誰かが支えながら一緒に暮らしたいというのが、本当のところですね。お母さんの気持ちを支える役が必要です。破滅になりそうな時は別居するけど、元気になったらお母さんと一緒に暮らすっていうのがよい。どもの成長にとってどうなんだろうねとか、親と一緒に悪くなっていかないかという判断が社会的にありますから、そこは専門家の介入が必要なんでしょう。ただ僕は、母親と一緒にね、良かったと思っています。全く分けられて、養護施設に入れられて、家族と交流が少なかったら、もっと切ないものがあったかもしれない。親が元気になってこそ、離れていられる。大変な親を入院させて、自分が離れていることは、とてもむなしいです。子どもとしては辛い。親と一緒にいた苦労は、後で何かの形で、子どものエネルギーのバネになると思うんです。

また、親に代わって自分のことを大事にしてくださる方と出会えて、安心感持てたら、親と離れてその方と暮らすというのも、自分の安定に役に立つのかなと思いました。

長江：親も子どもも、一緒に生活したい気持ちがほんとにだと思いますけれども、その点、専門家の立場として、言えることを何か。

土田：研究の中でも、障害を持ちながら子育てしている人が、子育てによってエンパワメントされるという結果もある。どのぐらいサポートできるのかなというところなのかなと思う。しかし、保健師たちも専門家で、危機的な状況にあると判断した場合は、入院を勧める。急性期だけ入院してはなれることがあっても、うまく回復してくればまた一緒にというところで、親子の絆が切れないようにしていけると良いのかなと思う。

長江：昨年の夏苺先生の講演では、10年ぐらい親と離れている時期があつたと思います。マンガを描いておられる中村ユキさんにもそういう時期があつて、お二人はその時期がつかつたけれど、そういう時期があつたので、今後の人生を生きていく上で、基礎を築くことができた。やっぱり病理に巻き込まれるので、自分のことに集中できる時間として、基礎を築くことができたというお話もされています。その辺はやはり個別になると思います。

そういった子どもの存在に気づけるのは、学校と親をみている医療の方だと思います。精神障がいを持つ親が子どもをもっていれば、そういう状況で暮らしている子どもがいると、その存在に目を向けて、支援の手を伸ばしていけたらいいかと思います。